

## 「グレー」と「灰色」について

—外来語と和語の類義語ペアの使い分け事例として—

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

### "Guree" (Gray) and "Haiiro"

: The Use of the Synonym Pair of the Loanword and the Japanese Native Word

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

*Key Words: Color Terms, Synonym, the Word of Foreign Origin, Artificiality, BCCWJ*

#### 要旨

外来語と和語の類義語ペアの使い分けについて、「グレー」と「灰色」を例として調べた。『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』で検索・調査した結果、先行研究から導き出された仮説「自然物は和語の色彩語、人工物は外来語の色彩語に形容される」は、棲み分けではなく有標・無標で記述するのが適切と思われた。すなわち「被修飾語の指し示す事物の人工性」という点において外来語「グレー」が有標であるという解釈が妥当と思われた。しかし、それぞれの語が複合名詞の前項になる場合には、ほぼ仮説通りの棲み分けが認められた。また、この類義語ペアには、色の表示だけでなく比喩的な意味・用法がある。BCCWJ サブコーパスをレジスターと考えると、レジスターによって外来語「グレー」と和語「灰色」の出現割合に差があるだけでなく、用法が比喩的なものに著しく偏る場合があり、専門用語である可能性が考えられた。

【キーワード】 色彩語、類義語、外来語、人工物、BCCWJ

#### 1. はじめに

意味の類似した外来語と和語・漢語のペアがある場合、どのように使い分けしているかを知ることは、日本語学においても日本語教育学においても意義のあることである<sup>1</sup>。

本稿で扱おうとするのは色彩語である。色彩語彙は、親族語彙などと同様、それ自体が完結性のある小さな体系をなしており、日本語における語彙構造を考える上でも、対照言語学の上でも、まとめて扱うのに適している<sup>2</sup>。そこで本稿では、いずれほかの色彩語ペアも分析することを視野に入れつつ、外来語「グレー」と和語「灰色」の類義語ペアの使い分けについて、コーパスデータに基づいて観察することにした<sup>3</sup>。

「グレー」を選んだ理由は、次の通りである。国立国語研究所（1964）と国立国語

研究所 (2004) には、「1.5 自然物および自然現象」の「1.502 色」あるいは「1.5020 色」の項に色彩に関わりのある名詞が収められている。その中で外来語だけを数えると、国立国語研究所 (1964) には 9 語、国立国語研究所 (2004) には 28 語が掲載されている<sup>4</sup>。前者の 9 語はすべて後者の 28 語の中に含まれている。またこの 9 語のうち星印の付けられたもの、すなわち「現代雑誌九十種の語彙調査において、使用率が 0.014 パーミル以上 (標本使用度数が 7 以上)」の語が「ピンク・ブルー・グリーン・ベージュ・グレイ」の 5 語であった<sup>5</sup>。したがって、少なくとも半世紀以上にわたり、なじみのある外来語色彩名詞として日本語に存在しているのはこの 5 語であると考えても、根拠のないことではないだろう。色彩語彙において、和語・漢語と類義語ペアになる外来語の使用実態を観察するにしても、この 5 語からはじめるのがよいと考えられるが、グレーが一番扱いやすそうに思われた。一つは、出現頻度の問題である。ピンクとベージュは、ペアとなるべき「桃色」「薄茶色」の出現頻度が低く、グリーンとブルーは逆に「緑」「青」の出現頻度が著しく高い。もう一つは、語の複雑さの問題である。ブルーに対応する「青」は、連体修飾の形として「青の」と「青い」の両方を区別する必要があり、また「青」は実際には緑色のものをさす場合がある。「緑」は色を表すのか、木の芽や葉などをさすのか、区別が難しい場合がある。そういうわけで、まず最初に分析する対象として「グレー」と「灰色」のペアを選ぶことにした。

ここで、色彩語彙における外来語と和語の類義語ペアについての、先行研究の記述を確認しておこう。柴田 (1984) と Backhouse (2003) がある。

柴田 (1984) は、色彩を表す「緑」と「グリーン」の関係について「ミドリの若葉／? グリーンの若葉」「? ミドリのワンピース／グリーンのワンピース」の例を挙げ、「自然物には『ミドリ』、人工物には『グリーン』という使い分けがあるようにも見えるが、そうはっきりしたものでもない。」という。しかし柴田が? を付けた「グリーンの若葉」の不自然さに比べて、同じく? の付いた「ミドリのワンピース」はさほど不自然に感じられない<sup>6</sup>。柴田も言うとおりの使い分けは必ずしも明瞭でない可能性がある。

Backhouse (2003) は、「グレー」は人工物 (服、コンピュータ関係、道具、紙製品、小物類などの工業製品) を形容する例が多く、自然物の形容をする例には制限があり、いっぽう、「灰色」は自然に生じたものの色 (動物、植物、雪など) を形容し、人工物の形容をする例は少ないとしている<sup>7</sup>。

このように、柴田 (1984) と Backhouse (2003) は、扱っている色彩語は異なるが、修飾する対象が「自然物か人工物か」ということが色彩語の語種の選択に関わりがある、とみている点において共通している。

そこで本稿では、「グレー」と「灰色」を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) で検索し、分析を行うにあたっては、上記の柴田 (1984) と Backhouse (2003) から導きだせる仮説、すなわち「色彩語の和語は自然物、色彩語の外来語は人工物を形容する」という仮説を検証する形で作業を進める。加えて、色彩語によくみられる比喩的意味の使用実態や、特徴のあるレジスターもみることにする。

ここで、「グレー」と「灰色」の文法的特徴と意味的特徴を確認しておく。文法的には、一致する点が多い。いずれも名詞であるが、具体物を指し示すのではなく、ものの属性（色彩）を表す。名詞を修飾したり（グレーの/灰色の [名詞]）、述語になったり（[名詞] がグレーだ/灰色だ。）、述語を修飾したり（[名詞] をグレーに/灰色に 塗る/する。[名詞] がグレー/灰色 になる/変わる。等）、という用法がある。意味的には、語が表す色彩の内容という点では、概ね共通するとみてよいだろう<sup>8</sup>。辞書を引くと、「グレー」の語釈の中に「灰色」があり<sup>9</sup>、「灰色」の語釈の中に「グレー」がある<sup>10</sup>。『類語大辞典』においては、「グレー」は「『灰色』の洋語的表現。」とされている。色彩を表す以外の派生的な意味には、一致しない部分がある。「灰色」は、「楽しくないこと。無味乾燥。」（以下 (A)）と「中間的。正邪がはっきりしないこと。」（以下 (B)）の意味をもつ<sup>11</sup>。いっぽう、「グレー」の語釈として、(B) の意味は一部の辞書<sup>12</sup>にあるが、(A) の意味は辞書に記載が無い。

## 2. BCCWJにおける「灰色」と「グレー」

### 2-1 「灰色」「グレー」の出現状況

「灰色」と「グレー」の比較に先立って、BCCWJ全体における出現数と、サブコーパスごとの出現数の分布を表1に示す。参考として「ねずみ色」も含めた。

表1 「灰色」「グレー」「ねずみ色」の使用度数（NINJAL-LWPforBCCWJによる）

	出版		図書館 書籍	特定目的サブコーパス									計
	雑誌	書籍		セ ラ ー	ベ ス ト	韻 文	白 書	広 報 紙	教 科 書	会 議 録	国 会	知 恵 袋	
灰色	16	333	532	56	13	5	4	1	26	40	51	1077	
グレー	189	189	142	23	0	1	2	1	12	99	72	730	
ねずみ色	4	12	32	7	2	0	0	0	0	0	2	59	

全体の傾向としては、「グレー」よりも「灰色」のほうが少し多い。「ねずみ色」は「灰色」「グレー」の、いずれの1割にも満たない。また「ねずみ色」は、ほとんどが書籍（出版書籍、図書館書籍、ベストセラー）に集中している。

「灰色」は書籍（出版書籍、図書館書籍、ベストセラー）に多い。雑誌は「グレー」が著しく多く、インターネットサイト（知恵袋、ブログ）も「グレー」が多い。

雑誌のように「より商業性・広告性の強い」媒体、および、知恵袋やブログのように「話しことばに近い」領域において、「灰色」よりも「グレー」が多く使われる傾向があると言えるだろう。国会会議録は話しことばの記録であるにもかかわらず「灰色」が多いが、これは後の表2でみる通り、ほとんどが色の表示ではなく比喻の用法で、

国会という専門家集団に特有の使用法だと思われる。詳しくは2-4で検討する。

「グレー」と「灰色」の出現数には少し差があるが、比較検討するには十分な数であろう。

## 2-2 「灰色」「グレー」の意味・用法の分布

BCCWJにおける「灰色」と「グレー」の意味・用法をみる。まず「色の表示」か「比喩」かで分け、「色の表示」の場合は「自然物」か「人工物」か、「比喩」の場合は(A)「楽しくないこと。無味乾燥。」か(B)「中間的。正邪がはっきりしないこと。」かに分けて、各々の数を表2に示す。

表2 BCCWJにおける「灰色」「グレー」の意味（「中納言」検索による）

サブコーパス	灰色				グレー			
	色の表示		比喩		色の表示		比喩	
	自然物	人工物	A	B	自然物	人工物	A	B
出版・雑誌	4	5	5	2	4	203	0	3
出版・書籍	168	103	52	7	33	170	0	14
韻文	9	4	0	0	0	0	0	0
白書	2	1	0	2	0	0	0	1
広報紙	2	2	0	0	0	0	0	2
教科書	1	0	0	0	0	1	0	0
国会会議録	0	0	0	25	0	0	0	12

(サブコーパス「図書館書籍」「ベストセラー」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」を省いている<sup>13</sup>。色の表示については、自然・人工のどちらでもないものは省いた。)

表2では、柴田(1984)とBackhouse(2003)から引き出した仮説「色彩語の和語は自然物、色彩語の外来語は人工物を形容する」に該当しない部分に、網掛けを施した(あとの表3・表4も同様)。

表2をみると、「和語『灰色』は自然物、外来語『グレー』は人工物を形容する」という傾向は確かに認められる。しかし、「灰色」はそれにあてはまらないケース(網掛け部分)もかなりの数にのぼる。すなわち「出版・書籍」サブコーパスの「灰色」の「色の表示」のうち、「人工物」が4割近くを占める。一方、「グレー」の「色の表示」における「自然物」の占める割合は、「出版・書籍」サブコーパスの「グレー」では2割弱と少なく、「出版・雑誌」では約2%にすぎない。

つまり「グレー」は「人工物」の形容に偏っているが、「灰色」はさほど「自然物」の形容に偏っている訳でもない。詳しくみるため、「灰色」「グレー」が形容してい

「グレー」と「灰色」について—外来語と和語の類義語ペアの使い分け事例として—

る名詞を表3に示す。表3は、修飾関係が単純な「当該語+の+名詞」の形に絞り、「NINJAL-LWPforBCCWJ」から頻度2以上のものを取り出して並べたものである<sup>14</sup>。

表3 「灰色」「グレー」が修飾する名詞（数字は出現頻度）

	灰色の N (頻度 2 以上のもののみ)	グレーの N (頻度 2 以上のもののみ)
自然 (生き 物関 係)	目 27 瞳 14 眼 4 髪 15 髪の毛 3 あごひげ 5 口ひげ 2 脳・脳細胞 4 顔 4 肌 2 手 2 体 2 産毛 2 毛 2 リス 3 猫 2 苔 3 幹 2 貴婦人 2 紳士 20* 男たち 4*	瞳 9 目 8 髪 3
自然 (環境 等)	空 29 雲 27 雨雲 3 密雲 2 曇り空 2 海 4 池 2 氷雨 2 霧 7 煙 6 光 8 影 4 闇 3 太陽 2 夕暮れ 3 夜明け 3 街 4 石 5 岩 2 月 12*	空 2
人工物 (衣服 以外)	壁 8 コンクリート 5 ビル 2 塀 2 煉瓦 2 シート 2 紙 2 布 2 鉄 2 塗料 3 絵の具 2 線 2 武神 16* 葉巻 4* 仮面 4*	線 2 ガラス扉 2 布 4
人工物 (衣服 の類)	コート 3 シャツ 3 ズボン 3 服 2 作業服 2 軍服 2 スーツ 2 開襟シャツ 2 ガウン 2 ストッキング 2 頭巾 2	スーツ 31 上着 6 背広 4 ズボン 6 パンツ 4 スラックス 3 スカート 3 プリーツスカート 2 セーター 3 シャ ツ 2 Tシャツ 2 ブレザー 2 ジャケッ ト 2 オーバーコート 2 ワンピース 2 タイツ 2 カシミア 2 制服 3 帽子 2
その他	物質 2 やつ 2 帯 2 世界 2 縞 2 斑点 3 地 2	部分 6 色 2 割合 2 縞 2 霜降り 2 チェック 3
比喩 A	青春 2 日々 2 道 2	
比喩 B	高官 4 マルチ 2	

\*をつけた「灰色の紳士」「灰色の男たち」「灰色の武神」「灰色の葉巻」「灰色の仮面」はそれぞれ特定のサンプルにのみ出現（ミヒャエル・エンデの『モモ』）。「灰色の月」は固有名詞（志賀直哉の小説）。

表3の網掛けも、仮説「色彩語の和語は自然物、色彩語の外来語は人工物を形容する」に該当しない部分である。

和語「灰色」はさまざまな自然物だけでなく、さまざまな人工物を形容していることが分かる。いっぽう、外来語「グレー」は、衣服を中心とした人工物の形容がほとんどを占めており、自然物で頻度が2以上のものは、瞳9・目8・髪3・空2だけであ

る。しかも、「瞳9・目8」は出典が全て翻訳物であり、「髪3」は、翻訳物もしくはファンタジーものである。つまり、素朴な日本語表現として、グレーが自然物を形容しているのは、表3のデータでは「空」のみということもでき、グレーが自然物を形容することは、ごく稀で例外的であるといえることになる（この「自然物を形容するグレー」については、後の2-3で詳しく論じる）。

以上の表2・表3から、「色彩語の和語は自然物、色彩語の外来語は人工物を形容する」という仮説は、不完全にしか成立しないことがわかる。すなわち、人工物の形容をする性質を仮に「人工性」と呼ぶならば、「グレー」の「人工性」は極めて高いが、「灰色」の「非・人工性」はさほど高くない。つまり「棲み分け」が起きているとは見なしにくく、有標・無標の概念でとらえるのがよいかと思われる。和語「灰色」は「被修飾語の指し示す事物の人工性」という点で無標、外来語「グレー」は有標、という解釈をするのが妥当であろう。

次に、「グレー」「灰色」と名詞との複合名詞を「NINJAL-LWPforBCCWJ」を用いて探し、「グレー」「灰色」が前項となるものを表4にまとめた。表4をみると、「灰色N」は自然物の色、「グレーN」は人工物の色、とほぼ完全に棲み分けがなされているといえる。特に「グレー」のほうは例外がゼロである。複合名詞の前項になる場合に限れば、自然物形容・人工物形容の分担が明確になるようであり、「色彩語の和語は自然物、色彩語の外来語は人工物を形容する」という仮説が成り立つといえそうだ。

ただし複合名詞の意味領域は、限定的である。「グレーN」は、色彩語そのもの（グレイブラウン）、色彩の様相や様式に関わる表現（グレイ調、グレイバランス、グレイスケール）、もしくはファッション用語（グレイチェック、グレイジャケット）にほぼ限定される。「灰色N」は、動物、鉱物、色の表現、などである。複合名詞においては後項とのつながりが自由ではなく狭く限られている、ということが、自然物形容・人工物形容の棲み分けが明確なことと関連している可能性がある。

ここで、比喩的な意味用法についてもまとめておく。

表2をみると、「灰色」には(A)「楽しくないこと。無味乾燥。」と(B)「中間的。正邪がはっきりしないこと。」の両方が認められるが、「グレー」には明らかな(A)の例は認められず、(B)のみであった。これは既存の辞書記述のとおりである。「灰色」は、全体には(A)がはたらく場合が多いが、「国会会議録」においては(B)のみであった（「国会会議録」における用法については、2-4であらためて検討する）。

表4の複合名詞においては、「灰色N」「グレーN」とも(B)「中間的。正邪がはっきりしないこと。」の機能を持つ例はあったが、(A)「楽しくないこと。無味乾燥。」の例は無かった。(A)の比喩的意味を持った状態で複合名詞を形成することが困難な

「グレー」と「灰色」について—外来語と和語の類義語ペアの使い分け事例として—

のかもしれない<sup>15</sup>。さらに、(B) の比喩的意味を持つ場合の複合名詞は、「グレー」は「グレイゾーン」「グレイカラー」という、辞書に載るような固定的な組み合わせに限られていたが、「灰色」は、「灰色決着」「灰色文献」のような、臨時的とおもわれる組み合わせがあった。「グレー」よりも「灰色」のほうが、比喩的用法の意味をもちながら複合名詞を自由に作れる性質を持つ、といえそうである。

表4 「灰色」「グレー」が前項となる複合名詞（数字は出現頻度、ただし頻度1の項目は数字を省略）

	灰色+N	グレー+N
自然 (生き物関係)	灰色ガン2 灰色クマ2 灰色母さん2(猫) 灰色ゲンゴロウ 灰色葦毛 灰色狼 灰色雀 灰色野鶏 灰色カビ 灰色髪 灰色頭 灰色仮面4* 灰色ばばあ*	
自然 (環境等)	灰色雲2 灰色スズ3 灰色大理石 灰色砂漠	
人工物 (衣服・装飾類以外)	灰色カラム2 灰色表示 灰色物質	グレーバランス6 グレースケール4 グレー表示2 グレー画像2 グレータンク グレー内装 グレー台紙
人工物 (衣服・装飾類)	(灰色洋服**)	グレートーン5 グレーチェック4 グレー文字盤2 グレーパール2 グレーメイク2 グレーバッグ グレーパンツ グレージャケット グレーリボン グレーデニム グレータイツ グレーハンチング グレーコーデュロイ
色名・ その他	灰色ブルー 灰色系統	グレーブラウン2 グレーパープル グレーメレンゲ グレー調 グレー部分
比喩B	灰色高官15 灰色政府3 灰色措置2 灰色決着2 灰色議員2 灰色無罪 灰色文献	グレイゾーン37 グレイカラー5

一見、複合名詞のようであっても、融合の度合いの低いものは省いた（「グレイ一色」等）。

\* は固有名詞。

\*\* は日本語が拙い印象のブログにおける例（「体重が抜けた」「見るからあまり」等の表現が見られた）。

## 2-3 「グレー」による自然物の形容 —例外ケースの検討として—

本節では、例外的ケースと言える『グレー』による自然物の形容を詳しくみて、例外の生起要因を探りたい。表5は、グレーが修飾する対象が自然物である例を、頻度1の例も含めて、列挙したものである<sup>16</sup>。

表5 BCCWJにおいて「グレー」が形容した自然物一覧（数字は出現頻度）

「グレー」が形容した名詞	出典
瞳9 目8 (人魚の) しっぽ1 葉1 光1 シルエット1	翻訳物
髪3	翻訳物およびファンタジー小説
猫3 歯1 木1 空2 影1	その他の書籍
犬2 花1 花びら2	専門雑誌あるいは専門の本
空1 汁1 (エビの絞り汁)	Yahoo!ブログ

表3と同様、数の多さで目立つのがグレーの「瞳・目」である。これらはすべて翻訳物に出現している。実は「灰色」の「瞳・目」も大半が翻訳小説なのだが<sup>17</sup>、一部、翻訳ではない小説（連城三紀彦、栗本薫、歌野晶午等）にも出現する。そのほかグレーの「髪・しっぽ・葉・光・シルエット」が翻訳物やファンタジーに出現している。

その他の書籍に現れたグレーの「猫・歯・木・空・影」の例を、作者の生年順に並べると次のようになる。

- ・グレーの木 (の斜格子) 大江志乃夫 1928生 歴史学者
- ・舌が真っ黒くなったり、歯がグレーになったり、 赤城稔 1957生 編集執筆業
- ・グレーだからグレッタ、三毛猫だからミケ 中山可穂 1960生 小説家 (恋愛小説)
- ・あのグレーの猫でさえ 中山可穂 1960生 小説家 (恋愛小説)
- ・ブルーグレーの猫を見下ろし 小林蒼 ?生 小説家 (BL小説)
- ・グレーの影 嬉野秋彦 1971生 小説家 (ライトノベル・ファンタジー)
- ・少しグレーがかった二月の空 林宏至 1971生 翻訳会社を経てメーカー勤務
- ・濃いグレーの空をじっと眺めて 柳沢小実 1975生 エッセイスト

専門雑誌あるいは専門の本に現れたグレーの「犬・花・花びら」の例を次に挙げる。

- ・「シルバーグレーの斑のもの (=犬)」「ゴールデン、クリーム、レッド、ブルー、白、グレーなどの単色 (=犬の色)」  
→以上2件とも、中野ひろみ著『いぬ・ねこ』山と溪谷社2001 PB16\_00049
- ・「グレーがかった花や鮮やかなグリーン」「花びらの裏側はグレーがかった青。」「花びらの裏側にひそむブルーグレーがアクセント。」  
→以上3件とも、雑誌『花時間』角川書店2004 PM41\_00434

用例が少なく、今後の検証が必要だが、仮説的には次のように考えられる。

色彩語「グレー」は従来、服飾品などの人工物の形容に使われており、自然物の形容には使われなかったが、翻訳恋愛小説における人物の目や髪の写真で使われ始めたという可能性がある。英語の *grey eyes* はグレーの色を表すとは限らないのだが（注8参照）、翻訳において「灰色の瞳／目」と訳されるだけでなく、「グレーの瞳／目」と訳される場合があり、「グレーの瞳／目」という表現が日本語に取り入れられた。

「自然物を形容するグレー」が使用される媒体としては、翻訳恋愛小説からファンタジー小説や翻訳ではない恋愛小説等の、空想的・美的価値を志向する文章へと広がり、さらに趣味性の強い雑誌、エッセイやブログ等の口語的文章へと広がりつつある。

グレーに形容される対象としての「自然物」は、目・髪から、しっぽ・歯などの身体の一部、犬・猫・花などの愛玩あるいは鑑賞の対象としての小さな生き物、そして空・光・影などの自然環境へと広がりつつある。

#### 2-4 特徴のある言語使用域 —専門語の可能性—

表2からわかるように、「国会会議録」は、極端とっていいほど用法が偏っている。すなわちBCCWJの「国会会議録」においては、「グレー」「灰色」とも色の表示に使われた例がほとんど無く、「グレー」12件と「灰色」26件のうち、「灰色」の1件<sup>18</sup>を除いた残りの全てが、比喩的意味(B)「中間的。正邪がはっきりしないこと。」であった。逆に、「国会会議録」以外のサブコーパスでは、比喩でなく色表示の件数のほうが多い(それぞれの色の出現数が2以下のサブコーパスを除く)。このことから、「灰色」「グレー」を、色を表さない比喩的用法に偏って用いるのは、国会という専門家集団における特徴と見ることができる。専門語的用法とってよいだろう。

詳しくみると、「灰色」には使われた時期と対象に偏りがあり、26件のうち20件が、1976年の「灰色高官」の類<sup>19</sup>で、ロッキード事件に関する話題であった。

それに対して「グレー」12件<sup>20</sup>は、1981、1983、1993、1994、1997、1998、2001年と時期的に広く分布し、使われた対象もさまざまであった<sup>21</sup>。

2-1で述べた通り、「国会会議録」は話しことばの記録であるにもかかわらず、同じ話しことば的な「雑誌」などと異なり、「グレー」よりも「灰色」が多いが、それは、色の表示ではなく比喩がほとんどであるためと、「灰色」による比喩が、特定の時期に特定の事件に関わって大量に出現したためである。

「国会会議録」で「グレー」「灰色」が使用された時期の分布からみて、「中間的。正邪がはっきりしないこと。」を表す語として、近年は「灰色」ではなく「グレー」のほうが頻繁に使われるようになってきた、という仮説もたてられそうだが、BCCWJ収録以外の国会会議録のデータも広く見渡して検証する必要がある<sup>22</sup>。

### 3. おわりに

外来語「グレー」と和語「灰色」を『日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて検索し、先行研究から導かれた「外来語の色彩語は人工物の色、和語の色彩語は自然物の色を形容する」という仮説について検討した。その結果、「灰色」はその仮説に該当しないケースも多数みられた。したがって、棲み分けではなく、有標・無標の概念で捉えるのが適当と思われた。すなわち、「被修飾語の指し示す事物の人工性」という点において外来語「グレー」は有標であるが「灰色」は無標、という解釈が妥当であると考えられた。ただし、複合名詞の前項となる場合に限っては、ほぼ完全に仮説のとおり棲み分けがみられた。

なぜ「人工性」が外来語「グレー」の選択と結びつくのか。おそらく、欧米の人工物とともに語が取り入れられたという移入経過の影響と、日本における英語の「近代的」「新時代的」イメージが「人工性」への連想と無意識のうちに結びつくためかと推測される。ただ、2-3 でみたように、「グレー」が自然物の形容に使われるケースも、わずかずつ広がっていくという可能性はある。

外来語・和語・漢語の類義語における意味の違いについては、外来語の意味範囲が狭いという見方と、その逆とがある。佐藤（2002）は、「和語が総称・全体名称・汎時的指示、漢語・外来語は個別称に分けられる」例が多いとしながらも、当てはまらない例もあることを指摘する。宮田（2007）における「メリット」、金（2006）における「トラブル」、宮田・田中（2006）における「リスク」は、いずれも類義語の和語・漢語に比べて、「用法が広い」「概略的な意味を表す」「結びつきの自由さ」をもつ外来語であった。本稿で扱った「グレー」については「広さ」「自由さ」があるとは言えず、逆に「人工性」という点で制限がかかっているようであった。比喩的な意味を2種類持つこと、比喩的な意味を保持したまま臨時的な複合名詞を形成できること、といった機能についても、和語「灰色」のほうに「広さ」「自由さ」が認められた。

今後、「グレー」以外の外来語色彩名詞についても検討していく予定である。

### 注

1 彭（2003）では、日本語学習者に対して、意味的に近い「外来語」と「和語・漢語」のペアを、それらの違いとともにあわせて指導することが効果的で親切であると述べている。

2 柴田（1968）を参照。

3 村中（2015）においては、外来語の色彩語「ピンク・ベージュ・グリーン・グレー・ブルー・ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」を、『青空文庫』のデータをもとに分析している。ただし、和語・漢語との類義語ペアに注目するのではなく、外来語色彩名詞の、日本語へのなじみ度の段階と用法との対応に注目している。

4 「スペクトル」「カラー」「モノクロ」などの、色彩と関連はあるが具体的な色彩を表さない語は除いて数えた。また、「オレンジ色」「クリーム色」などの、「色」が後接するものは含めて数えた。その結果、国立国語研究所（1964）にはピンク、ブルー、グリーン、ベージュ、グレイ、セピア、コバルト、エメラルド、オレンジ色、の9語があった。国立国語研究所（2004）

にはその9語に加えて、ブラック・ホワイト・オフホワイト・レッド・コーラル・パーミリオン・ワインカラー・マロン・クリーム色・モスグリーン・シアン・インジゴ・ネービーブルー・バイオレット・パープル・スモーク・アイボリー・ゴールド・シルバーの19語があった。

<sup>5</sup> 国立国語研究所による現代雑誌九十種の用語用字の調査は、1956年付け発行の雑誌が対象。

<sup>6</sup> 「NINJAL-LWPforBCCWJ」で検索したところ「緑のワンピース」はなかったが、「緑のジャケット」5件「緑色のセーター」3件「緑色のドレス」3件があった。すなわち和語「緑」「緑色」が、ワンピースに類似した人工物であるところの洋服を形容する例がいくつも認められた。

<sup>7</sup> Backhouse (2003) は、「ヤフー！検索」の最初の100件のエントリーをコーパスとして「グレー」「灰色」「ねずみ色」を分析している。それぞれの例の数は、グレー41件、灰色21件、ねずみ色69件である。またそれぞれの例の、使用文脈や使用ジャンルについては不明である。

<sup>8</sup> 安藤 (1986) によれば、英語の表現 grey eyes の色相については、「灰色」という説もあるが、「薄青色」という説、「green や yellow に近い色調も含む」という説、「色相ではなくキラキラ輝くことを意味する」という説もあるとのことで、安藤自身は「キラキラ輝く」説に賛同するという。つまり翻訳における「グレーの瞳」は必ずしも「灰色」ではない可能性がある。また、西尾 (1972) はグレーについては言及がないが、『『ピンクの』と『ももいろの』、『ブルーの』と『あおい』などとは、さしている色の内容も同じではない』としている。本稿で用いた資料における「グレー」と「灰色」のそれぞれがさす色の内容についても、一致しない部分がある可能性は否定できないが、大きな食い違いはないものと仮定し、比較の作業を行なう。

<sup>9</sup> 『精選版日本国語大辞典』『デジタル大辞泉』『明鏡国語辞典』『新潮現代国語辞典第2版』。

<sup>10</sup> 『デジタル大辞泉』『明鏡国語辞典』『新潮現代国語辞典第2版』。

<sup>11</sup> 『精選版日本国語大辞典』『デジタル大辞泉』『明鏡国語辞典』『新潮現代国語辞典第2版』の4辞典とも、この2種の語義の記載がある。

<sup>12</sup> 『デジタル大辞泉』と『コンサイスカタカナ語辞典第4版』。

<sup>13</sup> 「図書館書籍」と「ベストセラー」は、「出版書籍」で概ね代表できるものと考えた。「知恵袋」「ブログ」はやや変則的な使用もあると思われることから省いた。

<sup>14</sup> 表3はNINJAL-LWPforBCCWJの検索から取り出しているもので、表2とは異なり、すべてのサブコーパスが対象となっている。

<sup>15</sup> 「灰色青春」や「灰色日々」などの複合語が作られにくい、ということである。

<sup>16</sup> 表5の作り方はやや変則的である。表3のデータ（「NINJAL-LWPforBCCWJ」で「当該語十の+名詞」の形を検索）に加えて、表2の元データ（「中納言検索」による例文検索）をすべてチェックし、グレーの自然物形容の例を洗い出した。従って表2・3よりも数が多い。

<sup>17</sup> 「灰色の瞳・目」「グレーの瞳・目」の現れる翻訳物の多くはハーレクインロマンスである。

<sup>18</sup> 「国会会議録」における「灰色」のうち1件は、具体的事物の色を形容するのではなく、概念としての色を表わす語として使用されていたので（日章旗の色に関する議論の中で「灰色」の語が出現）、自然・人工のいずれでもないとして表2には含めなかった。

<sup>19</sup> 「灰色高官」の類というのは、「灰色高官」11、「灰色の高官」4、「灰色政府高官」3、「灰色の政府高官」1、その他1である。

<sup>20</sup> 「グレー」12件のうち、10件が「グレーゾーン」という複合名詞の形であった。

<sup>21</sup> 例を挙げると、「農水省管轄か国土交通省か」「集団的自衛権に関して」「介護認定のグレードに関して」「地下水汚染における特定有害物質に関して」など、さまざまな文脈で、「グレーゾーン」あるいは「グレー」の語が、比喩的意味 (B) で用いられていた。

<sup>22</sup> 国会議員団以外の専門家集団でも同様の専門語用法が生じている可能性がある。大学教員から成る、ある専門家集団で、「グレー」を (B) の意味で頻用するとのことである。

## 参考文献

安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店

金愛蘭 (2006) 「外来語『トラブル』の基本語化-20世紀後半の新聞記事における-」

## 『日本語の研究』 2-2

- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』大日本図書
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表-増補改訂版』大日本図書
- 佐竹昭広 (1955) 「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』 24-6
- 佐藤武義 (2002) 「語と語彙構造」『現代日本語講座 4 語彙』明治書院
- 柴田武 (1968) 「日本語の色観」『ことばの宇宙』 3-8
- 柴田武 (1984) 「外来語は日本語を乱すか」『国文学』 29-6
- 柴田武 (1988) 「色名の語彙システム」『日本語学』 7-1
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 西尾寅弥 (2002) 「語種」『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』朝倉書店
- 彭飛 (2003) 『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴』凡人社
- 宮田公治 (2007) 「外来語『メリット』とその類義語の意味比較-新聞を資料として-」  
『公共媒体の外来語』(国立国語研究所報告126)
- 宮田公治・田中牧郎 (2006) 「外来語『リスク』とその類義語の意味比較-既存の類義語をもつ外来語の存在理由-」『言語処理学会第12回年次大会発表論文集』言語処理学会
- 村中淑子 (2015) 「外来語の色彩語について-『青空文庫』パッケージを用いて-」  
『人間文化研究』 3
- Backhouse、Anthony E. (2003) ‘Collocational aspects of near-synonyms :Illustrations from a small corpus’.北海道大学留学生センター紀要第7号

## 辞典

- 『精選版日本国語大辞典』(小学館 2006)、『デジタル大辞泉』(小学館)、『明鏡国語辞典』(大修館書店 2002-2006)、『新潮現代国語辞典 第2版』(第2刷 新潮社 2005)、  
『コンサイスカタカナ語辞典第4版』(三省堂 2010)、『類語大辞典』(講談社 2002)

## 資料

- BCCWJ「中納言」検索 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>
- BCCWJ「NINJAL-LWPforBCCWJ」 <http://nlb.ninjal.ac.jp>  
(なお、BCCWJを検索し、本稿に用いたデータを得たのは、2015年2月時点である。)

## 謝辞

本稿は、桃山学院大学「特別研修国内 A」の期間中に大阪大学文学研究科「現代日本語学演習」(2014年度後期、石井正彦教授担当)において発表させていただいた内容に、加筆・修正を施したものである。発表の機会と貴重な助言・教示をくださった石井教授、ならびに演習参加者の皆様に感謝申し上げます。

\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第3号をお届けします。今回も、どうぞご堪能下さい。

なお、本号に掲載された2つの論考（石川論文とメイナード講演＝南保輔訳＝）に関連して、ヘリテッジ&メイナード編『診療場面のコミュニケーション』（勁草書房）が、9月末に刊行されています。あわせてお読み頂ければ幸いです。

次号は、2016年3月発行となります。慶應義塾大学の池谷のぞみ氏の神戸での講演記録（樫田の作業遅延により、掲載号が1号先送りになりました）のほか、日本社会学会大会のテーマセッション『専門職教育の社会学』（2015年9月20日午前開催。於早稲田大学）の記録も掲載の予定です。どうぞ続けてよろしくお願ひします。

付記：『現象と秩序』は、国立国会図書館雑誌記事索引の対象誌に選定されました。CiNii等でも「論文単位」「論文著者単位」で検索が可能となっております。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2015年度）

編集委員

樫田美雄（神戸市看護大学）

中塚朋子（就実大学）

堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事

松下晶季（神戸市外国語大学）

坂根杏奈（神戸市外国語大学）

編集協力

村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第3号

2015年 10月30日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（ダイヤルイン）

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>